

特 18 門  
號 1833  
卷 71

繪本古図記六篇卷之十一

目録

名護屋陣中軍陣定活

道古園朝野が沈落と怒り給ふ園

堀若左衛門梅本と刺殺以園

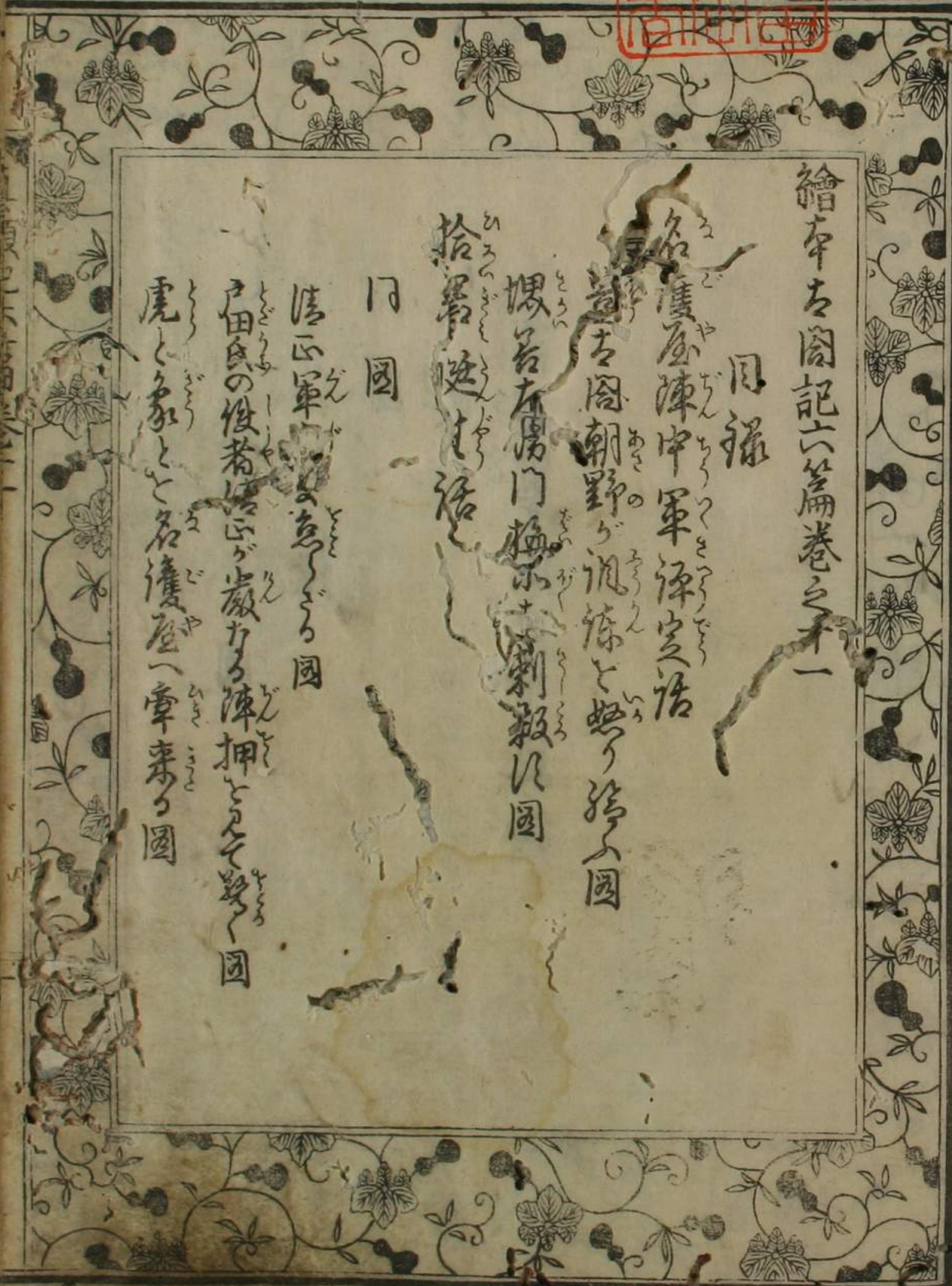
拾遺活

門園

信正軍の意をさぐる園

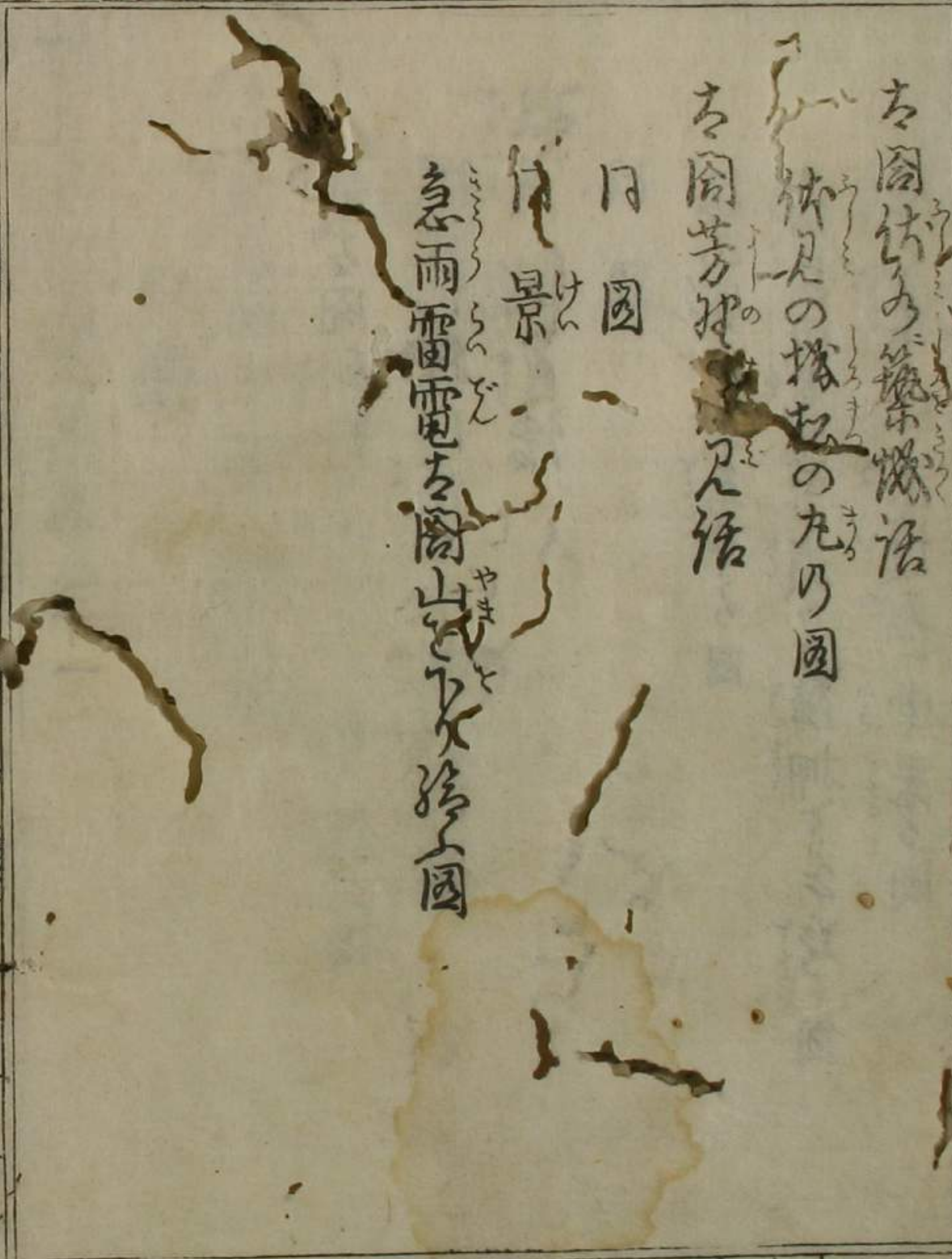
田島の役者はいつか歳方る陣押とるを怒る園

虎と象とを名護屋へ牽来る園



右図はの藤原氏  
依見の塔の丸の國  
右圖芳野のん活

日國  
急雨雷電を圖山式及び國

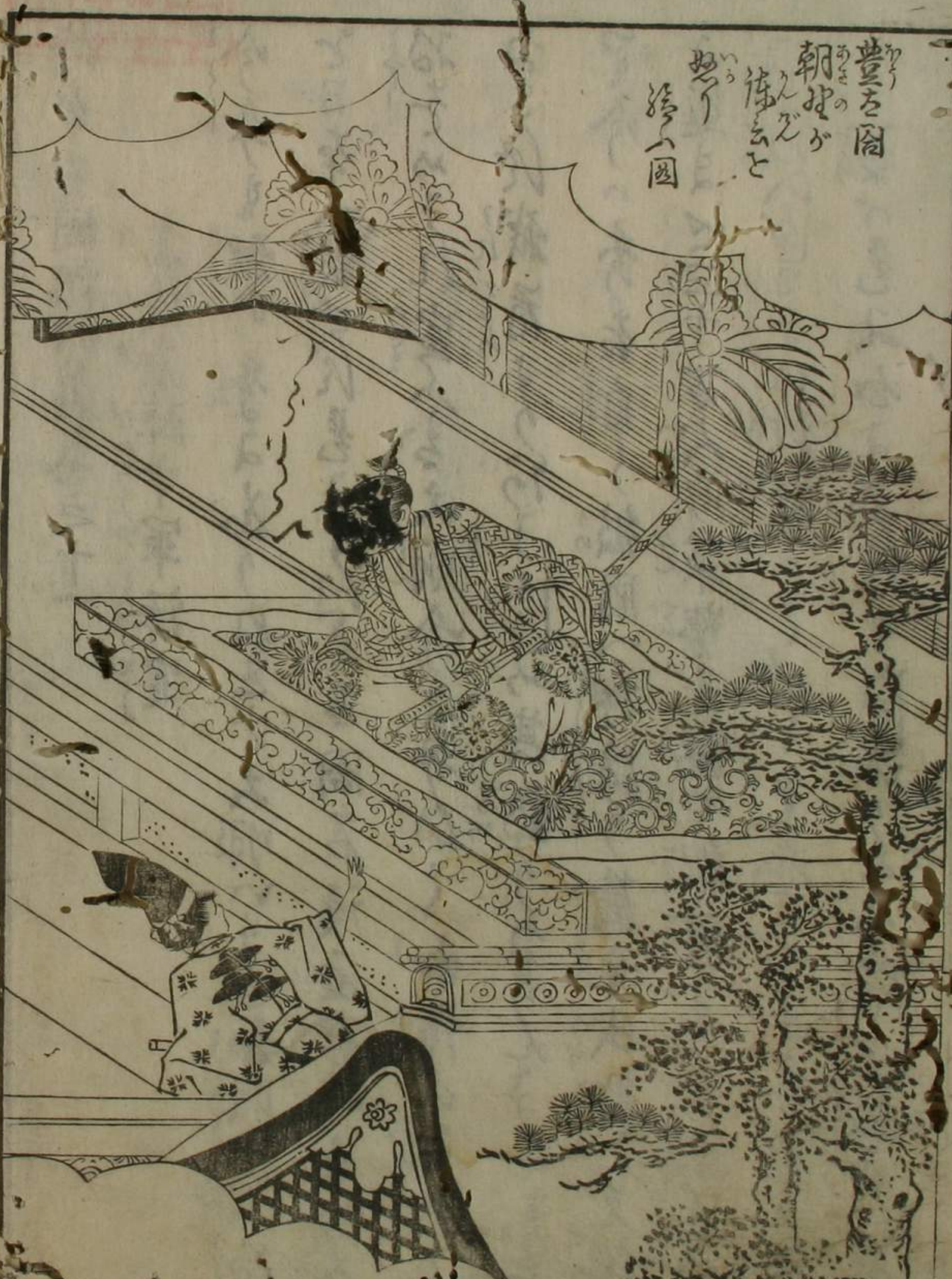


繪本古圖記六篇卷之十一

右圖は藤原氏  
依見の塔の丸の國  
右圖芳野のん活

今年も秋の季よりありぬまゝ大明いませ和賚の盟約  
と日本本國せは是よりいづる右圖右邊在陣の諸大  
將をいせん宣ひたる大明今又押ひて和賚の返報に  
あまの我首よりいづる其好りたるらんやと知  
る今も秀吉自ら彼國へ押送り備生氏郷と先陣  
又進ませ三十万人の軍勢を廻て朝鮮より去るは  
明の政務の政務いづくを摩多摩多家と信  
し是は是又いづくはしいうみあふやと信を

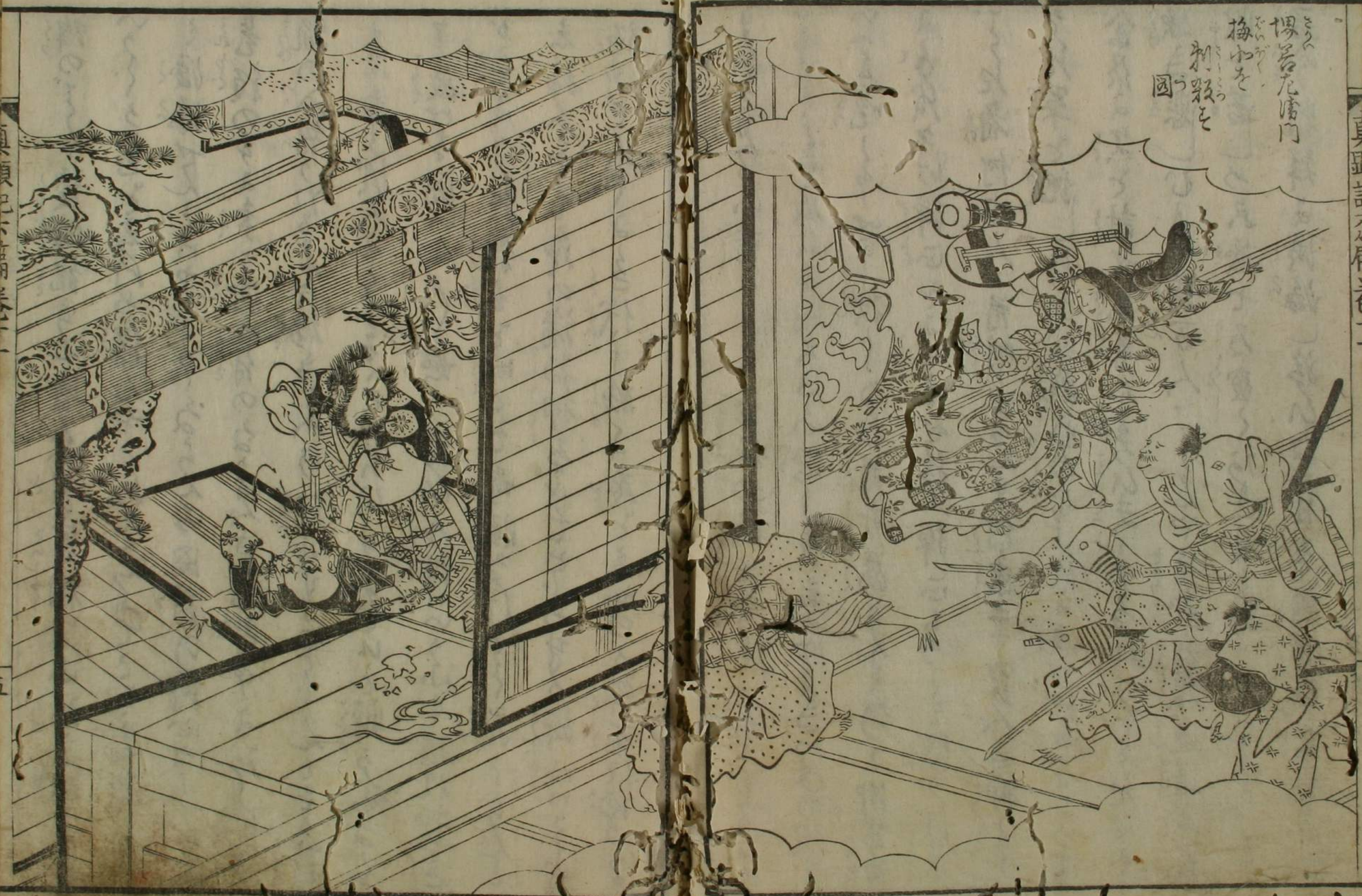




豊を園  
 朝比の  
 人ど  
 後と  
 如  
 後園

年家郷これと安く蒲生氏郷は郷に多き中より  
 急しく出るとま辰のてく先陣の太ぬううんい武士の  
 面目してこそい人抑我を弓箭をえて軍中へ死せんと  
 ころの既三十三余年いもさ見若くき後とさうびと  
 あり人の路たるとおの居いん何かりに惜くこそい  
 といと一方の太ぬうけは朝鮮大明の警首と並  
 老後のまひ出な仕と中されうらぬ朝野彈正はとき  
 朝野より保國しけ席よりさ実者よりの評定ときと是  
 ういしごまがうくい摩惠多殿と年家郷は向い中々  
 右御辺強て幸と論じ終るま及び右を論けうらの御ある

まひをさるふ若よりま右祖の附てうらむ  
 中よりとぬるを同太き小怒り乗者心よきつひの附  
 いりま吃と中せ中換ぐるは首打屋さんとの御帯カ  
 ぶも爪をけ弾正をゆるはせ終る弾正らうも強が其  
 下れた者何十人が首削らるんも何条幸のいんき抑  
 され軍と終し終の朝鮮八万の中は及び右日本六十  
 余及び文と討せ兄弟をまひまよるれ子とさうたさ  
 歎き悲しむりの幾万人やんやそ外兵糧運送み百  
 姓と苦しめ又幾七万盡くは道押とありていぞや終  
 君今朝鮮は後海し終ひる日本國中の東西南北



梅水園  
新穀を  
園

夏目漱石の『浮城物語』

浮城物語

陣のどくは次軍械記らん摩患多宰相いふ防ぎ制をた  
 うらう是と志ゆめ得んやこれをあつてこそ先陣は進  
 ち後海せんといやさうららん古國昔の御心うらん  
 是程のふ多う御心付のうらんべき是是さゆふはひん定  
 流の入り替りたるそは跡き人の河より人もんとさる龍  
 まうらひび人よとさるばさやひげゆるとはと輝るをま  
 や放む古國いふは無く跡ひる程いふふもわれ母のさ  
 がさよりうた難と吐とと奇怪るれとと飛くらんと  
 志跡ふをを陣の諸お押るそととらむる陣正のさ  
 陣はてへくよと代へ陣と立持のさ陣をにゆらる

びおしは肥後の徳本よて海少とらる若一様と既し流  
 大丸よ及ぶはし名瀬屋表へ浪進せうら右國よみ終  
 き終ひ朝中陣正が狙凍も押ひ合させらと急ぎ陣  
 正と石くし肥後の徳本よ一揆お記せり海に嬌子尻系  
 ちま幸永をんでまぬさしとる急ぎ証むるく斬ちる  
 しとしと後波されうらふ陣正洞をまがして是をよりこび  
 母の陣正へゆらる息幸永よ道兵六よ余人をりつて  
 肥後國へ強しは長肥後の一揆とらる後摩乃浪人梅水  
 とつての堂屋集り肥前肥後の西國は勢をみるは流し  
 徳本の燃は押寄せ美付の甚急なり徳本よは流しは

東鑑言海篇卷十一



真蹟言文御書卷十一

家臣坂若丸清門とてし乃爾至居して守りて居る所  
國士多く梅山は跡の兵勢いよく  
款くわく一旦門を閉じ降参し  
さんと計略をたよめ城を用いて梅山は  
海に受て梅山は入らんとて城を  
敵は城若丸清門梅山はまゝ  
城と梅山はあつとれい今  
梅山は心とやりけんとめ  
梅山は心とやりけんとめ

御食意は梅山は飲で城は  
城のひていけ耐斬んと  
らん後世しと卒へうしぬ  
ドとあひあち短刀と接  
屍と膝の踏く口方を  
城と目づけ切てう存を  
等と私をせやけ國中  
さげて誰と忠と盡さん  
梅山は余黨をよこし  
討り功を威せらるん





拾君  
の  
誕生  
の  
圖

真蹟  
拾君  
の  
誕生  
の  
圖

大軍つゝつゝ汝等が三族と東首せしむん何ぞと  
希人らると嘆りなきが實はもとこいひは憐憫は心  
梅山がもの若とせんぐよ切まゝにば大ねを討て誰  
も勇気とたりんをたれ或は討て或は逃れし終は一揆の終りなり  
於てけ有る名護屋表へは進しつゝ小途にて朝村幸永  
が軍勢又出のひまうくのほ中達せしつゝ幸永の軍と比  
名護屋の陣へ向りつゝけ堀若尾清門の籠二百石の士方  
しつゝは正しけ働きと大威し十倍しつゝ二ふ石を成る  
秘書しつゝ

拾君誕生

朝村若尾清門が働きと一揆の大ね梅山と教しは本  
は出堀若尾清門が働きと一揆の大ね梅山と教しは本  
洗ふ平均のよしと云しつゝ多きを固むはむしは幸永が  
旁と稱し堀若尾清門が働きと一揆の大ね梅山と教しは本  
終ふとれがけ強働よよのくを固自り御後海の御沙はし  
中へ大明より音信のよと相結はむれり小朝鮮に在る  
加蓋自計改法正先は院惟毅が小西飛騨守と大明へ  
つゝいれを後若くはつゝつゝ又教月を送りつゝを  
終り十一月三日の勢と幸し全州名は柳し世機と幸し  
看取得るつゝ三百余級よあふはし名護屋表へは進しつゝ



戸川の  
後者  
信正が  
殿なる  
陣と  
押  
て足  
勢よく  
図



真蹟言公篇卷十一

きじし石清ふがふゆいときよはしとて感懐と楊ふ今う年を  
二年冬十二月大坂の機を押ししまははる若御着りる  
はうせ給ひ若君のうらふ出来とせ給へる京都より関白  
系次急ぎ大坂より給ひ書牒を馳て名護屋表  
と書け給ふと大坂御給ひかぎりはしけ節朝鮮のたうひ  
開あれいとて摩惠多々家御蒲生氏郷朝御彈正忠  
諸事とまうせ給ひを関り大坂のわらせらと若君御誕生の  
御慶賀とまうとてゆゆりせ給ひ給ひ拾君と世まうと  
るふよりけ度若君拾君と名付給ひ是共堂の珠のど  
と後秀頼と中をわい出若君の御しけけ朝鮮の谷

と浦名地（小西飛騨守が若君使へ）司馬名守人若君とあふひ  
院名惟教名為明の官使と丸小日本後海のふ三浪江名地まで  
出さるはしきとてくれが和賸のりお違ひはしとて十二月の末  
を関り御中知として朝鮮在陣の諸大お其すとる御さる  
そ人々ふは若君を計既清正福志摩加々守高松山又川  
丸浦門智海系九流女侍後秀兼加々丸馬名女若君石田  
治那名地浦三城増田右浦門尉長盛大谷刑部若海若軍兵  
万余人の朝せりけ付加々清正令州名地又在陣せりぬを関  
より御朝とてき合合到りぬまはれて軍勢とまうち谷山  
浦名地ゆりたる若君後十余日の落りりてて日本の軍兵



真田記 卷十一

ありしは城と多く構へ軍勢と勢て守らしむ或は七八里一里  
 又十里一りむらりあき一城を設けたり戸田氏部が浦の密  
 淵をわたり不承守りたりが清心と交係ありしは御意へさ用  
 意して訪者より依て其長吉瑞又即右傍門神谷を右傍門  
 兩人を遣ひして途中まで出づるふけむらひ合戦し止  
 じ方よ敵兵はけりむらびは美細津谷のあ人草を清心と  
 瑞一里計出するふそや清心の先々の勢出まらあ人の  
 迎ひ是と入るふ軍兵はけりむらびは或の具固り腰兵糧と付籠る  
 ず風よるびうせ磨筒の銃砲火繩ととさそ又百挺の先々  
 ともせ清心の漏塗の具是又狼乃長馬帽子の胃の緒と結

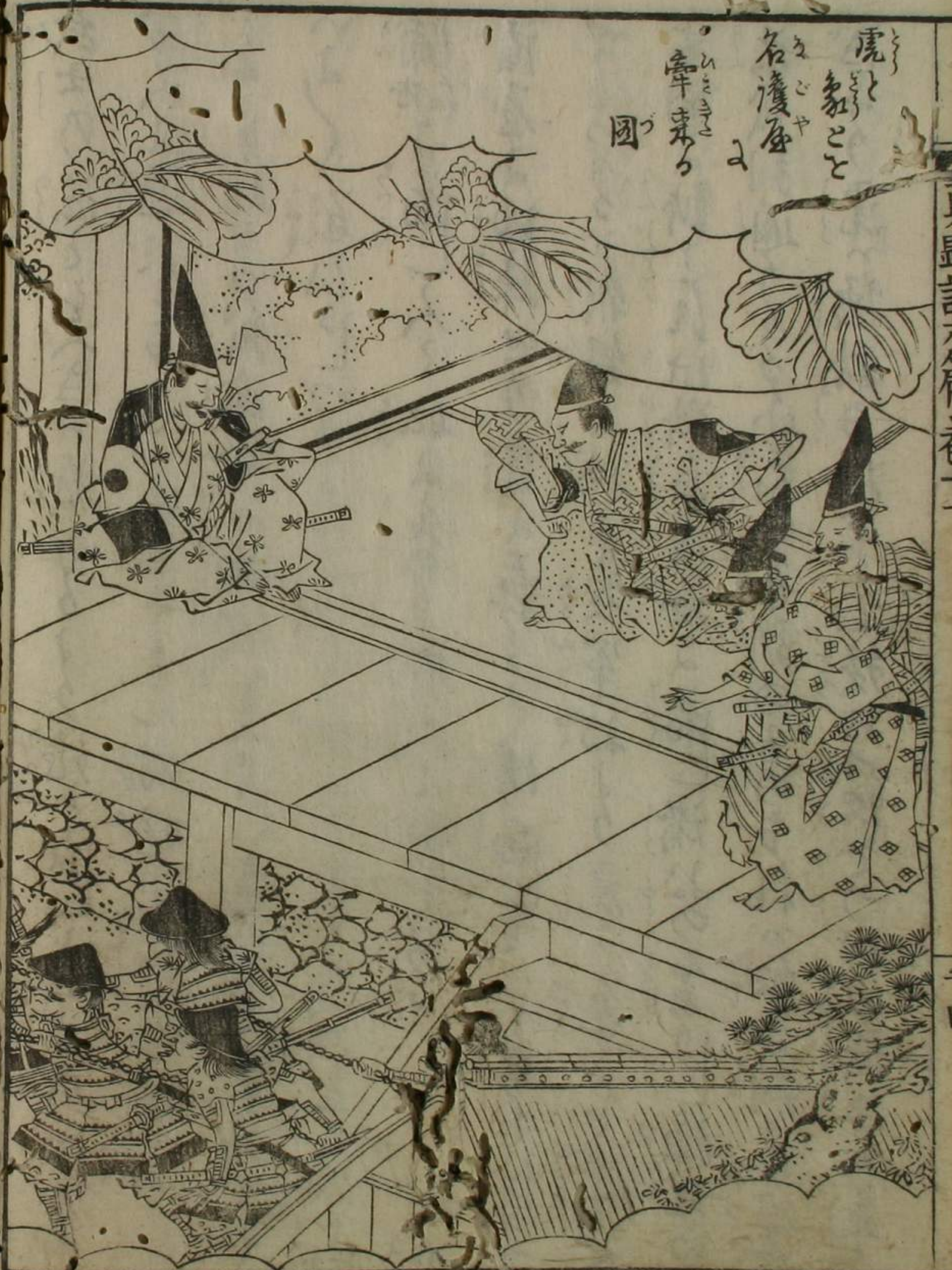
勢出脚出草鞋をふらそを固り九本馬蔭の馬をけしと  
 自ら脊よとじ月毛の馬よ白泡とませ歩ませたり兩人  
 の迎馬より押して民部がけとを中し清心のくまきふ  
 よあそびよとそ入着陣とてし叔我軍兵はけの外城はと  
 たり風呂と多くたててゆくまを湯と引せ湯はけ  
 変りてんけ中ゆりてやとれい人と何をうけらそは  
 兩人うけ終りいとて馬よおのり急ぎ陣をたたりうりや  
 と告る程多く清心着陣し城を門より入る極細は腰  
 おうけそあつらぬ或部が近習の士二人立ちりて清心の  
 といし馬蔭をきて旗籬よ立ちるを問ふ外乃侍あ三

文

文

人考其門をまゝしんづの細とぞれ脚出とぞれ付とけ付  
 清正腰に附する細腰子の袋と自ら扱兵座後の中央  
 扱中のたるふとぞれとぞれきててとぞれけり武部が道智袋  
 と傍へ扱ひたる袋の中よ本三井むり味嚼一包狼縁と  
 百文入らまゝり武部少陣出むり清正乃嚴をかり  
 陣押とぞれとぞれき出付目よ入るる款兵とぞれとぞれ  
 ろるやと勇ぶるる清正若へて武士の物をとぞれとぞれ  
 ろとぞれとぞれ我のつとせは身とやとせは士卒等と  
 皆急るべし万一よも急のりあん時急りて誤り行らば  
 までの武功しはしくぬん突と急りてかく討ばしとぞれ

武士の法とぞれとぞれ嚴ありより地はじ上一火の心る中  
 万火の通伝とやせばおとらん若勝とぞれとぞれとぞれ  
 とぞれとぞれ武部少陣出とぞれとぞれとぞれとぞれとぞれ  
 いふとぞれ教ひとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれ  
 浦名とぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれ  
 清正は清陣せり突とぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれ  
 ぞれとぞれとぞれ朝鮮とぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれ  
 古図とぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれ  
 若引通とぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれ  
 ぎとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれとぞれ



虎  
名  
牽  
團

貞  
顯  
言  
六  
篇  
卷  
上



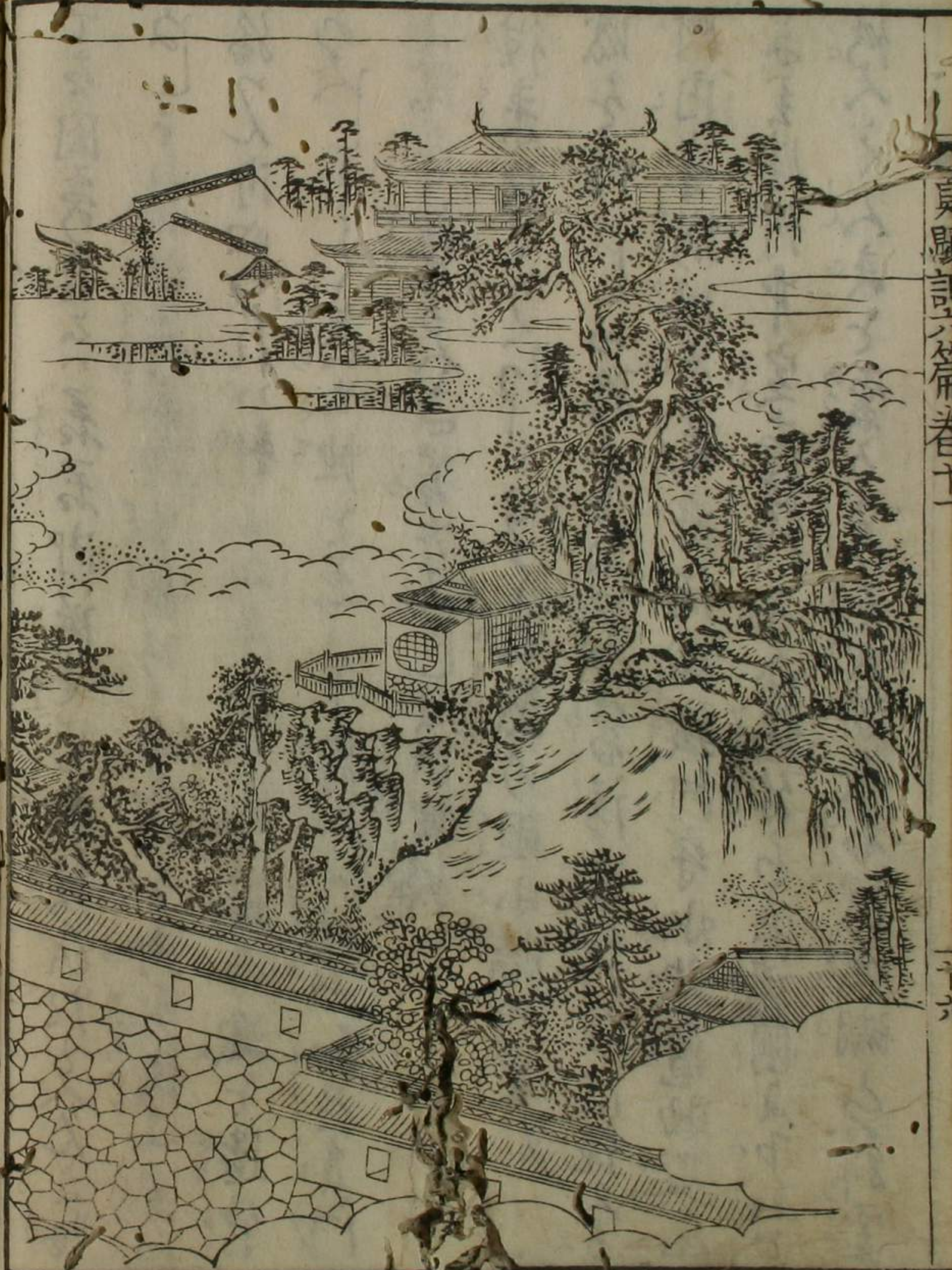
十余人左右より引通りたるは合人くとも虎を引  
来りしとて驚き三鼓をひきしはしりたるは虎の聲し  
ざるは行跡をたて春の梅の香をとりて吃と虎と小  
らまれり小虎と立とせり暫く虎をふりてとせり  
初ぬ加茂尾馬女吉秋の壁と雲無り居眠してあり  
漸虎と引りて後同族用き人々何りやと驚き  
牽て通りし虎といふ所へ小云りてとせりぞたの月しき  
勇士なり

左國築城伏見

文禄二年日将の書を以て新玉のまのこたれたる事

て左國秀の吉とて若君御誕生の御勢ひたえんは物  
はしきれいけ若君御生長はるは大坂を御平城と定め  
給ひん御心多れば新玉と左國御居居の城と造管  
あはしとて其土地と名を給ふは始り和呂多門  
と城を築くべき若かりしはけ地僻け小坂の  
往來たすりたりとて城の國小橋の里伏見  
城を修ししは給ふとてつら香清守勢は佐々木  
河内守勝川守若守佐後強河守水津電助石尾  
五左衛門中定右清門守小幡守らと諸國より  
修人々夫と名をなすり九又万人石城築城と料雲

依負の  
松の丸



真蹟訂正八冊卷上

十一

坂坂より運りせ材本は破れ山は去り依るより伐出可し疾し  
 を日は終るいりるる幸丸又は歸りて出丸りり号す  
 て松の丸といふける右の河を委系松を吉が女松  
 風ど乃ち河方入らせらとは世終ふよりを河方  
 と世の人松の丸どのと稱すなるは舟の浪浪若し  
 ちは浪の波は又は後終ふより浪及と唱す人松は松  
 丸の川端小石を築きうりるしき丸めづるるる於に  
 樹本と植を中に書濟と立林屬に沈香本を以て教す  
 築をと造り物好風流一方をして外要室の矢倉  
 と澄石頂いりり更なりにしと山麓くまりくる城郭を

正月の内は必然くも右の河に河勢抑せれぬ者あり  
 左の河勢花見

文禄三年二月中旬右の河勢吉と花見の河勢思  
 せらとは世終ふより浪及と唱す人松は松  
 丸の川端小石を築きうりるしき丸めづるるる於に  
 樹本と植を中に書濟と立林屬に沈香本を以て教す  
 築をと造り物好風流一方をして外要室の矢倉  
 と澄石頂いりり更なりにしと山麓くまりくる城郭を

豊右衛門 初を 後を 図



貞節 六段 卷之二

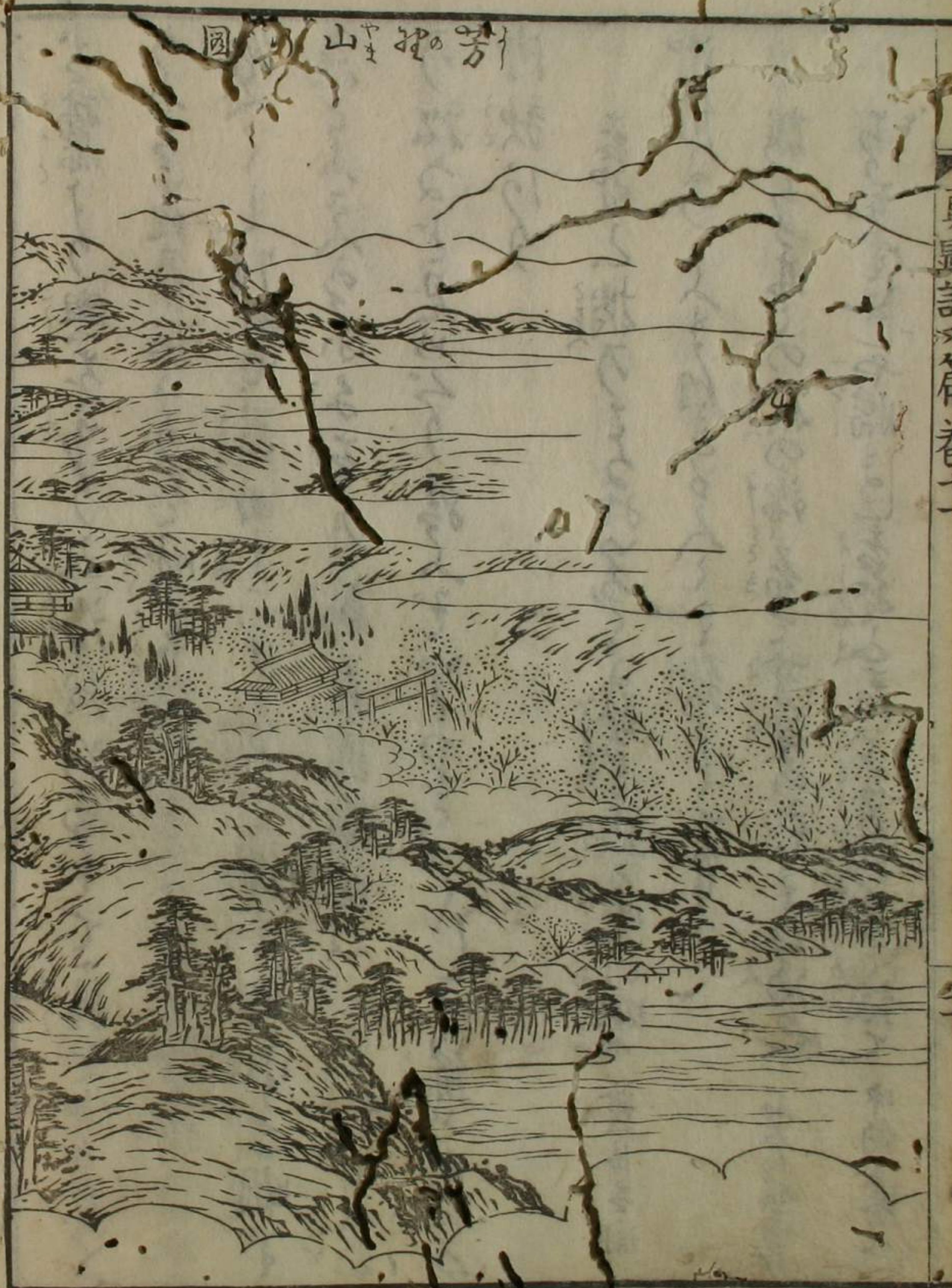
河都人多者うらも若きしはむまてつ街み出さ移  
たれを同い制ごとく仕餐又作り眉鉄束らるも若  
登るる河形勢方うは移き者の見せりそ河野ひの  
まご末まごく押はし月ととく怪びぬるぞ滋と氏  
君のみさりたりとてかまほし廿七日の紀伊の國  
の橋しと移ひ市の坂と列り移へ大和中納景  
御の河備とく怪き登飛と志門らの移ひ中絶  
あうう途出さくむ久佳し入移ひ教く乃河饗  
るや小を不と立せ移ひはゆり芽野らに列着と

本篠より興をりり山落成りもて貞と中り移  
うき花のけりりを吹去風し中くまひて雨と中  
飛くし移は花田をたつる移又移く乃小を朝  
飛くさふの赤も赤の橋花園操回ぬとの山がれ  
り松など見せり移ふぞつとくしと移  
河歌りり

古井の梢のさるれつらくは移るる雪の曙  
河野のさるる人こそ歌よとてせり  
橋らうはりの橋の錦着て芽野の心とまけゆ  
らうさしはしや橋はしを移ふと本屋の雪と縁て  
中絶を移



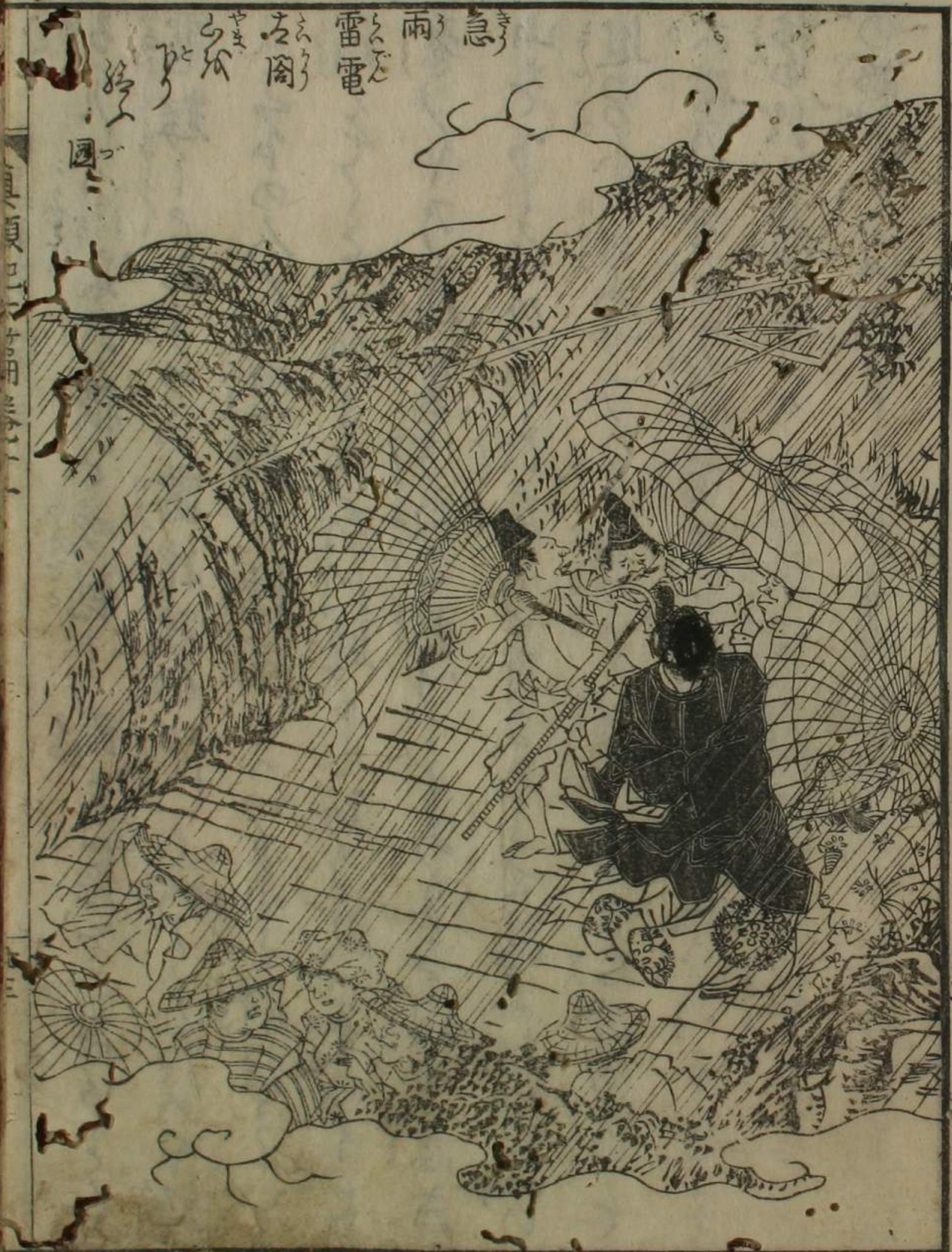
新羅山園



とうや花源雪と隆を登りてね本下三修持節を  
 其外新らしむるを云りて叔子の多君仁王門をさして  
 後事へ入て終へて安ん中納言秀俊後郷乃りて  
 御舎と言ひて並みそれ入らせ終ひ彼を一夜と明し  
 終ふおまろ日ハ橋が嶽後礎砌天皇乃押しましあは  
 皇居の跡ると御後し安かくこに日を過し三月三日と  
 云ふも理ふに詣で終ふ是るん大所乃靈場やて奉  
 へりてうらあひりさまいと殊勝な炭を度くたつる  
 其の中よ金半大塔ともども教も刻ぬ寺々の礎  
 と方へて建つるいさるくもあつてこれに圖を嚴寺と常り

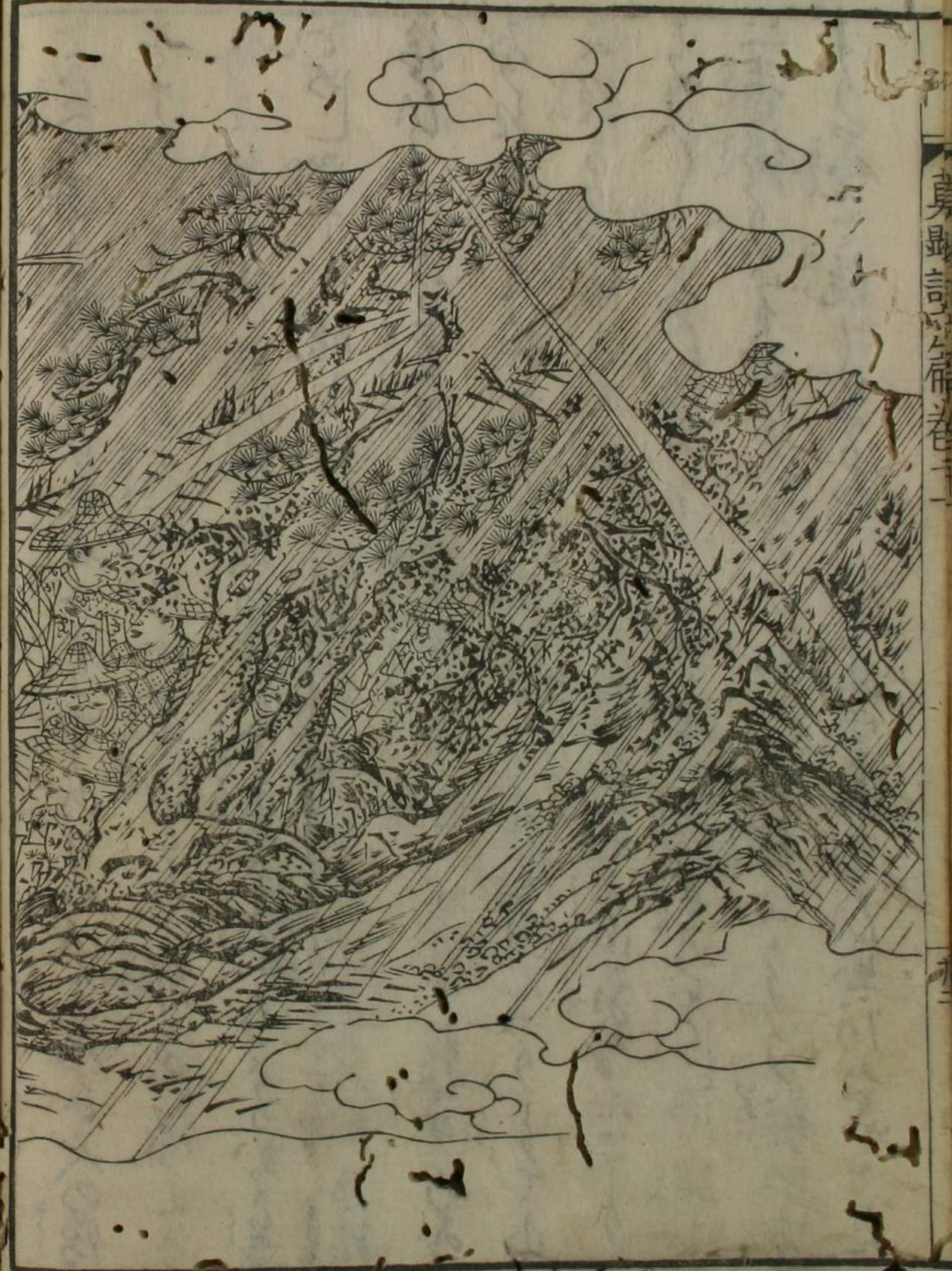
ぶ定り御り終ふる三日あり中の日ハけふハ主人の傍  
 ありてくを集り大廳の御吊いとく佛多福んご  
 終ひて終ひの終ひ其次の日の今妻令別乃りさるかく  
 とせし登り一旅と作し終ひる柳大所けふは用は始  
 終ひよりよる来歳百歳の歳と積りて終ふか  
 終ひてやうもはしこれや殊じき見物らんやりとて山  
 又ゆる信信も云も文あり近き村里山家さんごより  
 二番終りつる終ふる月けしき俄よりより輕の方  
 あり墨と梳けつるやう又雲あひひ出たるおと見

真言宗御書卷十一



急雨  
雷電  
左  
右

山  
道  
雨  
景



真  
景  
山  
道  
雨  
景







真言宗  
卷一

十一

